

『創造都市と社会包摂』
水曜社より刊行

「創造都市」も「社会包摂」も、新自由主義的改革による「福祉国家」の解体を乗り越えて、新しい分権的な福祉社会をめざす共通の土壌の上に位置する社会改革の試みである。…中略…

本書は、芸術文化のもつ創造力、とりわけ、社会的に排除された人々をエンパワーメントする

力に着目しつつ創造都市論と社会包摂論を架橋し、世界的な都市再構築の流れのなかで、コミュニティの再生への胎動を描写するものであり、とりわけ、悩める大都市・大阪の再生に向け足元で進む社会実験に参加しつつ、分析を進めたものである。(本書まえがきより)

第1部「進化する創造都市、その文化戦略」

第2部「大阪の市民知が再構築する歴史・文化空間」

第3部「社会包摂に向けて、新都市空間論の誕生」



『創造都市と社会包摂 —文化多様性・市民知・まちづくり—

佐々木雅幸・水内俊雄(大阪市立大学都市研究プラザ) 編著
ISBN978-4-88065-220-7 C0033 定価 3,360円(税込)

水曜社 www.bookdom.net/suiyosya/

*全国主要書店・ホームページで購入できます。

地域のためのアートマネジメント講座 シンポジウム
～アート&アクセス～

地域のためのアートマネジメント講座では、シンポジウム「アート&アクセス」を開催いたします。アートを通してコミュニティにアクセスする可能性について、西成区の通称「釜ヶ崎」と呼ばれる地域をケーススタディの対象として考えます。いま、釜ヶ崎では新たなアートの胎動が…。

日時:2009年9月12日(土) 11:00～17:00
*開場は10:30

場所:西成プラザ

参加費:無料

*参加をご希望の方は、aaam@ur-plaza.osaka-cu.ac.jpに、お名前、ご所属、ご連絡先(メールアドレス)を9月9日(水)までにご連絡ください。

*会場の広さの関係上、事前にお申し込みいただいた方を優先させていただきます。

イベント・研究会の予定

各詳細は、都市研究プラザホームページをご覧ください。

8/29-30	第15回社会福祉研究交流会 *29日は大阪市立大学杉本キャンパス、30日は大阪健康福祉短期大学にて開催	第3ユニット
8/31	水都大阪イベント「アートのくねくね道」 ～イギリスのホームオペラや釜ヶ崎の紙芝居劇の事例から考えるアートの仕事、社会との関わり～	第2ユニット
9/1-5	国際ワークショップ都市社会地理学の最新動向 …ベルギー、ルーベンカトリック大学	第3、4ユニット
9/5	第3回 創造都市ラウンドテーブル会議 …横浜市	第1ユニット
9/12	地域のためのアートマネジメント講座 シンポジウム ～アート&アクセス～ …西成プラザ	第2ユニット
9/17-18	ソウルサブセンター開設記念シンポジウム …ソウル・韓国都市研究所(ソウルサブセンター)	全ユニット
10/9-10	ホームレス支援全国ネットワーク研修 …千葉県市川市	第3ユニット
10/17-18	貧困研究会 第2回研究大会 …大阪市立大学	第3ユニット

■特別研究員(若手)公募
G-COE特別研究員(若手)募集(平成21年8月募集分)
募集期間:平成21年8月3～7日。口頭試問は、8月19日を予定しています。
詳細⇒ <http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/about/recruit.html>

■URP-Newsletter 次号発行予定は、2009年11月です。

URP
Osaka City University | Urban Research Plaza
大阪市立大学 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、2006年4月に誕生しました。日本最大の公立大学として、これまでも都市の研究に注力し、実績をあげてきた大阪市立大学が、都市再生へのチャレンジとして立ち上げた全く新しいタイプの研究施設です。「プラザ」という名前が示すように、「都市」をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。大阪や周辺都市、さらに海外の都市に小さいサテライト施設(現場プラザ、海外サブセンター)を設け、教員・院生スタッフが現場や海外に出て研究やまちづくり活動を行っています。また、「プラザ」は、世界第一線の都市研究者・政策家と国際的なネットワークをつくり、国際シンポジウムやワークショップを開催しています。2007-11年度グローバルCOE拠点に採択され、「文化創造と社会包摂に向けた都市の再構築」をテーマに多彩な研究プロジェクトを展開しています。

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/>

558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
tel: 06-6605-2071 e-mail: office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp

所長 佐々木雅幸 副所長 水内俊雄 岡野 浩 富田常雄
ユニット長 1U 佐々木雅幸 2U 中川 眞 3U 水内俊雄 4U 岡野 浩
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/staff.html>

大阪市立大学 都市研究プラザ ニュースレター 第4号 2009年8月
編集委員会 コーディネータ 轟明眞一郎、佐藤由美、角 知子、西田貴子
<http://gcoe.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/fellow.html>

URP Osaka City University Newsletter Issue 4, Aug. 2009
大阪市立大学 都市研究プラザ ニュースレター 第4号:2009年8月

keyword's

column

創造都市
【Creative City】

「創造都市」とは、市民の活発な創造活動によって、先端的な芸術文化を育み、革新的な産業を創出する都市であり、グローバルな環境問題やローカルな地域社会の課題に対して、創造的に問題を解決できる『創造の場』に富んだ都市である。

また、芸術文化の持つ「創造性」を、新産業や雇用の創出に役立て、ホームレスや失業問題の解決に生かし、都市を多面的に再生させる試みとして成果を挙げてきた「欧州文化都市(欧州文化首都)」の経験を総括する中から生み出された都市モデルである。世界金融危機の中で破たんした「グローバル都市」に代わって、グローバル化と知識情報経済の時代における代表的な都市モデルとして、欧米のみならずアジアにおいても大きな注目を集めている。

ユネスコは2004年より創造都市のグローバルアライアンスを提唱し、ボローニャ市、モントリオール市、ベルリン市、金沢市、神戸市、名古屋市など、19都市が加盟している。国内では文化庁が2007年より横浜市、札幌市、金沢市など創造都市政策の実績のある都市を表彰し、そのネットワーク化を進めている。未曾有の財政危機に苦しむ大阪市では都市研究プラザが、「大阪創造都市市民会議」やアートNPOなどと協働しながら、草の根からの包摂型創造都市の具現化に取り組んでいる。

佐々木雅幸(都市研究プラザ所長)

'Creative Cities' are those cities that foster leading-edge arts and culture and give birth to innovative industries through the energetic creative activities of their citizens, and are cities which abound in the kind of 'creative spaces' which can creatively solve the problems of the both the global environment and local regional society.

The 'Creative City' is an urban model arising from the accumulated experience of European 'cultural cities' ('European Cultural Capitals') which have produced results in multifaceted urban regeneration utilizing the 'creativity' of arts and culture in the creation of jobs and new industries, and in solving problems of homelessness and unemployment. As a representative urban model in the age of globalization and the knowledge and information economy, it is attracting great attention, not only in Europe and America but in Asia as well, replacing the 'global city' model which has broken down in the midst of the world financial crisis.

Beginning in 2004, UNESCO called for a global alliance of creative cities, and so far 19 cities have joined, including Bologna, Montreal, Berlin, Kanazawa, Kobe, and Nagoya. Within Japan, since 2007 the government's Culture Agency has officially recognized Yokohama, Sapporo, Kanazawa, and other cities for their achievements in creative city policies, and is promoting a network of such cities. In Osaka, which is suffering from an unprecedented fiscal crisis, the Urban Research Plaza is actively engaged in the concrete realization of a socially-inclusive creative city, in cooperation with the Osaka Creative City Citizens' Conference, arts NPOs, and other groups.

特集1 『CITY, CULTURE & SOCIETY』の発刊にむけて

SPECIAL1 Forthcoming Publication of 『CITY, CULTURE & SOCIETY』

大阪市立大学都市研究プラザでは、2010年3月にエルゼビア社から発行される『CITY, CULTURE & SOCIETY』(CCS)の編集体制を以下のように整えつつある。

■CCSの目的・射程

『CITY, CULTURE & SOCIETY』(CCS)は、文化創造と社会的包摂を旗印とし、都市のガバナンスを中心に扱う学術ジャーナルであり、都市に関する先駆的な研究を促進し、都市のガバナンスとマネジメントを推進することを主な目的とする。CCSは様々な観点を取り入れた新たな学際的パラダイムを提案し、それらを都市が抱える課題に適用することを目指している。また、都市に住み、文化の担い手でもある「人」に焦点を置く。

とりわけ重要なトピックとして、都市計画、文化創造、社会的包摂および社会的排除、社会的持続可能性、文化テクノロジー、都市ガバナンス、持続可能な都市、創造都市、アートマネジメントなどが挙げられる。CCSはピア・レビュー(専門家による評価)による国際学術誌として、経済学、経営諸科学(経営・商学・会計)、プランニング、政治学、統計学、地理学、社会学、文化学、人口学、行政学を含む様々な専門分野からの寄稿も歓迎する。

CCSは理論と実務の架け橋的役割を担い、実務に埋め込ま

れた理論を掘り起こし、本誌の3領域である、都市・文化・社会の総合を目標としている。方法論としては、定性をベースに、定量との相互浸透を図ることになる。

■CCS編集局からの現況報告および今後の目標

CCSは2010年3月の創刊号に続いて、6月、9月、12月と年4回発行される予定である。出版元のオランダ・エルゼビア社からは、都市研究を専門に扱う学術誌として『Cities』が発行されており、CCSの発刊に先立ち、同誌から「都市研究プラザ特集号」が今年秋に出版される。

そこで、来年からの発刊に備え、現在、CCS編集局では以下の作業を進めている。

- ・アソシエイト・エディター、ボードメンバーの確定
- ・創刊第1号の執筆依頼
- ・今後本誌で扱う特集や内容についての検討

以下は、エルゼビア社やオックスフォード大学内の海外編集オフィスとの連携を図りながら、近々に決定していく事項である。

- ・誌面に記載されるAims & Scopeの内容
- ・表紙デザイン
- ・執筆要綱

このCCSは、大学の機関としてはアジア初となる学術ジャーナルとして独自性を打ち出し、世界で通用するトップジャーナルを目指すものである。いずれはアジアの若手研究者にも活躍の場を提供したいと考えている。同時に、都市研究プラザにおける研究チームの活動蓄積をもとに、新しいタイプの国際学会Association for Urban Creativity(AUC)が創設される予定である。このAUCは、CCSを成長させるためには学会と実業界をカバーする都市研究交流組織が必須であるという趣旨から発案された、CCSの学術的基盤となるべき学会であり、グローバルな都市研究のコミュニティの創造を目指している。運営は都市研究プラザおよび海外サブセンター、海外のパートナー組織によって行われ、CCSを含むジャーナルや雑誌、データベースなどのサービスを提供する。また、都市研究プラザではAUC設立の出発点として2010年に国際学術シンポジウムの開催を企画している。こうした国際ネットワークの構築により、CCSの持続的な発展がサポートされるとともに、「アートを媒介にした包摂型都市」の新たなあり方を探り、都市・文化・社会的包摂の相互浸透の方法論を提示してい

く上でのグローバルな研究プラットフォームが形成されることになる。

また、CCSとして、今後UNESCOなど国際機関との連携強化も視野に入れている。都市研究プラザでは、UNESCOと連携してアジアにおける創造都市ネットワークを広げるべく、「世界創造都市フォーラム」をすでに3回開催しており、CCSではこうして構築された関係をさらに発展させ、創刊2年目のVol.2, No.1においてUNESCO特集号を編集するのを試みるとともに、たとえば名古屋、神戸、ボローニャ、モントリオール、サンタフェといったUNESCO創造都市を一都市ずつ各号で取り上げ、詳しく紹介することなども検討している。UNESCOとの関係の深いジャーナルの一例としては、1976年にカナダのバンクーバーで開催された国連人間居住会議(United Nations Conference on Human Settlements:通称ハビタット HABITAT)を契機に発刊された『Habitat International』が挙げられる。こうした事例を参考にしながら、UNESCOとの新たな連携関係を模索するつもりである。UNESCOやUNICEF、UNDPといった機関を擁する国連は、いわば都市・文化・社会というCCSの研究領域をすべて網羅する組織であり、CCSとしてこの3領域の結節点を論じる論文を掲載していく意味でもぜひとも関係を強化したいところである。

■エルゼビア社の概要

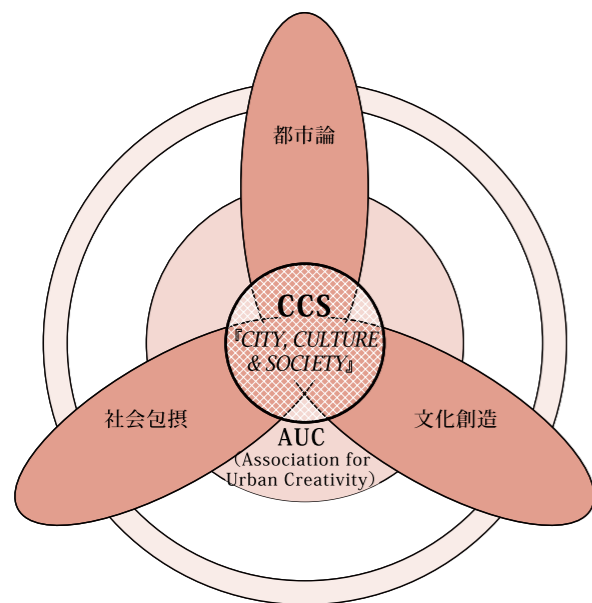
CCSの出版母体となるエルゼビア社は、1880年、オランダのロッテルダムに創立された総合学術出版社である。1999年には、サイエンス・ダイレクトという電子ジャーナルのポー

タルサイトを他の出版社に先駆けて創始した。サイエンス・ダイレクトは2009年現在、2,500の学術雑誌の900万以上の論文を掲載するフルテキスト・データベースとなっている。また、2004年にはスコパスの運用を開始した。スコパスは、5,000以上の出版社から発行される18,000以上の科学・技術・医学・社会科学・人文科学の学術ジャーナルを網羅する、世界最大級の書誌・引用文献データベースである。CCSは世界の学術出版界で重要な位置を占めるエルゼビア社との深い協力関係の中で編集作業を行うこととなる。

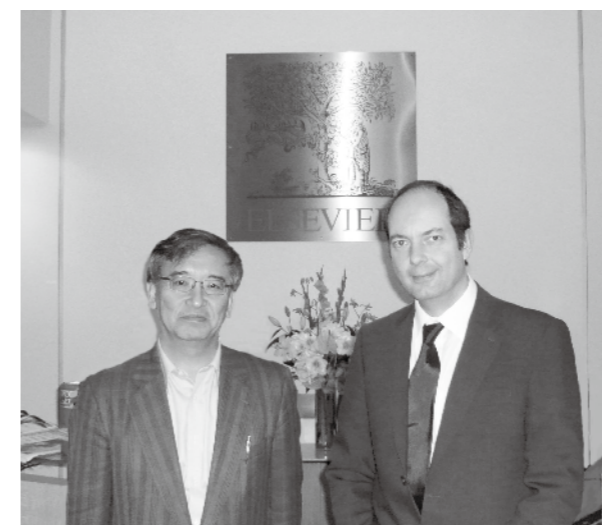
<< CCS編集局、河井・西田・堀口

『CITY, CULTURE & SOCIETY』(CCS) is an academic journal dealing mainly with urban governance under the banner of cultural creativity and social inclusion whose principal goals are to encourage groundbreaking research on cities and to promote urban governance and management. CCS aims to set forth new interdisciplinary paradigms from many different perspectives and adapt them to the issues that cities are facing. It also focuses on 'people', who are the inhabitants of cities and the carriers of culture. Especially important topics will include urban planning, cultural creativity, social inclusion and exclusion, social sustainability, cultural technology, urban governance, sustainable cities, creative cities, and arts management. As a peer-reviewed international academic journal, CCS welcomes submissions from many specialized fields including economics, the management sciences (management, business, and accounting), planning, political science, statistics, geography, sociology, cultural studies, demography, and policy studies. CCS will act as a bridge between theory and practice, uncovering the theory that lies buried within practice, and aims at a fusion of the three domains that are its concerns, cities, culture, and society. Methodologically, it will create a mutual interpenetration of the qualitative and the quantitative, based on the former.

Editor-in-Chief: Professor Masayuki Sasaki, Director, URP, Graduate School for Creative Cities
Managing Editor: Professor Hiroshi Okano, URP, Vice-Director, Graduate School of Business



CCS概念図



佐々木CCS編集長とエルゼビア社・エグゼクティブ発行人(地理・計画領域)Dr.クリス・プリングル氏

特集2 地域のためのアートマネジメント講座(前期)

SPECIAL 2 Community-based Arts Management Seminar (First term)

■ 文化庁「文化芸術による創造のまち」支援事業

都市研究プラザ所長の佐々木雅幸(創造都市研究科教授)が委員長を務める地域アートマネージャー育成事業実行委員会の主催により、2009年5月から「地域のためのアートマネジメント講座(前期)」が開講した。「地域における文化芸術の創造、発信及び交流を通じた文化芸術活動の活性化を図ることにより、我が国の文化水準の向上を図ること」を目的とする、文化庁の平成21年度「文化芸術による創造のまち」支援事業に採択されたのである。

実行委員会は地方自治体である大阪市と大阪市立大学都市研究プラザを中心に、平田オリザ(都市研究プラザ特別研究員/大阪大学コミュニケーションデザインセンター教授)、大阪芸術大学の非常勤講師でサントリーミュージアム天保山学芸員の植木啓子氏などによって組織され、将来の大阪におけるアートマネジメント研究教育の連携を視野に入れた体制となっている。

■ 必要とされる「地域のためのアートマネジメント」

半年間の講座は全10回からなり、各分野でアート振興や地域活性化、社会問題の解決などで第一線の現場に立つ方々を講師に招き、議論を重ねていくなから、「地域のためのアートマネジメント」とは何か、その本質を見極めようとするものである。

本講座は通常のアートマネジメント講座とは異なり、「地域のための」という点に重点が置かれているところに



第1回(5月23日)の講義を行う佐々木所長と、ゲストファシリテーターの山口洋典氏(應典院主幹/同志社大学大学院総合政策科学研究科准教授)

特徴がある。そもそも文化庁の掲げる「文化芸術による創造のまち」を実現するためには、芸術文化を扱うアートマネージャーの人材育成が何より先決であるが、それだけでは十分でない。アートマネジメントに関する従来の知識やノウハウに加え、地域に固有の特性や問題、コミュニティや社会的マイノリティに関する知識と洞察力といったものが強く求められる。しかし大阪など関西圏では一般的なアートマネジメント教育の機会すら非常に限られており、さらに「地域のため」に焦点をあてた講座はほとんどないといってよい状況にある。

準備期間の短さから受講募集の広報は非常に限られた手段と期間とならざるを得なかったが、申込数は我々の予想を遙かに超え、当初の予定受入数を増員し、最終的には相当数の申込者を断らなければならなかった。このような機会が如何に求められ、そして不足しているかを如実に示すものであり、我々の取り組みの重要性をあらためて再認識することとなった。その関心の高さは新聞にも取り上げられている(5月27日、大阪日日新聞)。

■ アートとは? 地域とは?

本講座は6月末時点で4回の講義を終えた。毎回約20名の受講者が出席し、関係者を含めると30名を超えて会場は常に満員である。

第1回はイントロダクションを含めて佐々木雅幸が講師を務め、世界的な創造都市の動向の下にアートマネジメントを位置づけ、各都市の実践を紹介した。

第2回の島田誠氏は神戸にギャラリーを構えるとともに

にアート・サポート・センター神戸の代表を務める経験から、ファンドレイジングによるアート振興の実践や、市民がアートを支える社会の意義を語った。

第3回の志賀玲子氏(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任教授)は難病に冒された知人の生活支援をあえてアートプロジェクトと位置づけ、日々直面していく困難や喜びのなかから、自身がこれまで携わってきたアートマネジメントやアートに対する考えを根底から揺さぶられた経験を語った。

第4回は行政のアートマネジメントへの取り組みとして、菅谷富夫氏(大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員)を招き、此花区が取り組むアートによる地域活性化の事例を中心に、行政が抱える問題などが議論された。

今後も別府現代芸術フェスティバル2009「混浴温泉世界」で総合プロデューサーを務めた山出淳也氏や、コミュニティアートを標榜する下山浩一氏(NPO法人コミュニティアート・ふなばし理事長)、その他インドネシアやタイからも講師を招くなど、多彩なラインナップを予定している。

■ 評価とこれから

毎回受講者に提出を求めているアンケートには、「もっと講義時間を長くして欲しい」「もっと質疑応答や議論の時間をとってほしい」といった積極的な意見が多くみられ、受講者の反応の良さや意識の高さが伺える。受講者はアートマネジメント関連の職に就くことを目指す学生を中心に、現に各ジャンルのアートやまちづくりに従事する社会人、文化行政に携わる公務員などによって構成さ



第1回(5月23日)の様子

れている。

講座の最終的な評価は全講座の終了を待たなければならないが、今後彼らが地域に根ざしたアートマネジメントの現場に立ち、日々の実践に取り組むなかでさらに認識を深め、そこから本当の成果が現れることを期待している。なお、10月からはさらに新たな陣容を擁して後期講座を開催する予定である。

<< 高岡伸一(都市研究プラザ特任講師)

This seminar consists of ten sessions aimed at ordinary citizens. Its goal is not a typical study of arts management, but rather to study and discuss the forms of arts in actual practice in the context of their relation to localities and communities. Running from May through September, it explores the essence 'Community-based Arts Management' from multiple perspectives at each session by inviting a group of lecturers who are working in the forefront of the field and accumulating discussions through the explanations of their various practical experience. Under the topic of the trends in the world's creative cities, multi-pronged themes have been put forth including citizen-participatory fundraising to support the arts, the arts in communities and among social minorities, attempts at art festivals in declining regional cities, and various practical experiences in arts management in the Asian realm. There are few opportunities to study arts management in Osaka or the Kansai Region, and there are almost none that focus on localities and communities as this seminar does. In spite of the fact that advertising for this seminar was very limited, the response greatly exceeded our expectations. The participants who have gathered are mainly students who are aiming to work in the field of arts management, or professionals already working in various fields connected to arts management, community building, or cultural administration. Their zeal and awareness is quite high, and their enthusiasm is shown in their desire to extend the lecture time. We expect even more active discussion to develop in the future.



「地域のためのアートマネジメント講座(前期)」の受講生募集チラシ

豊崎プラザ 第3回 長屋路地アート

Toyosaki Plaza The Third Nagaya Roji Arts Festival

豊崎プラザでは、2009年5月30日(土)に「第3回長屋路地アート」が開催され、110名余りが参加した。今回の長屋路地アートの目的は、耐震改修工事が完了した長屋のお披露目と、この間の取り組みに対する数々の受賞の報告であった。恒例の町家寄席は、普請をほめることを題材にした上方落語の「牛ほめ」で一同が大笑いして、幕を閉じた。

改修工事が完成した長屋を見学したあと、主屋で報告会が開かれた。最初に、藤田忍(生活科学研究科教授)から「2008年度関西まちづくり賞」(日本都市計画学会関西支部)の受賞が報告された。この賞は、関西のまちづくり及び都市計画の分野で貢献したもののや、特色のある取り組みに贈られるもので、審査評では、「都市住宅としての長屋の活用と住宅経営モデルの確立や他の長屋所有者への波及効果、また大学がまちづくりに果たす役割において今後貢献することが大きい」と高く評価された。

つぎに、小池志保子(生活科学研究科助教)から、2007年度に改修された北長屋が「第25回住宅リフォームコンクール」の理事長賞と、「リジェネレーション・建築再生展第8回設計アイデアコンテスト」の環境賞を受賞したことが報告された。いずれの賞も、元の建物を尊重しつつ、斬新なデザインによって再生され、かつ都市の活性化につながる汎用性を持つ点が評価された。この北長屋の改修は、2008年度日本建築学会大会建築デザイン発表会でも、



設計者の学生が改修長屋を説明する様子

耐震設計や手法、学生らの現場施工への参画、完成後のクオリティの高さが評価され、「木造建築の可能性発表表彰」を受けている。

専門の学会で評価される一方で、長屋路地アートによって、地域の人びととの交流も着実に進んでいる。居住者のプライバシーに配慮して大がかりな広報は行っていないが、回を重ねるごとに地元からの参加者が増え、今回は近隣の居住者が知人を案内する姿も見られた。アンケートには、改修工事への評価や、改修長屋に住みたい、プロジェクトに参加したいとの声があった。

「街に溶け込む大学、市民や都市とつながった研究組織」を目指す、大阪市立大学都市研究プラザの現場プラザの一つとして、豊崎プラザの果たす役割は大きなものがある。

<< 綱本琴(豊崎プラザRA)

The Third Nagaya Roji Arts Festival was held on May 30, 2009 at the Toyosaki Plaza with more than 110 participants. The purpose of the meeting was to announce the completion of seismic retrofit of the nagaya and to report on the recent awards for the project. After a tour of the reconstructed nagaya, a meeting was held at the landlord's house and there were reports from Fujita Shinobu (Professor, Graduate School of Human Life Science) on the Kansai City Planning Award, and by Koike Shihoko (Assistant Professor in the same department) and students involved in the building project on the Reform Competition and the Regeneration and Architectural Revitalization Exhibition. While this was praiseworthy as an academic meeting, this was an occasion that also substantially furthered interaction with the people in the community. As one of the field plazas whose goal is a 'research organization connected to the citizens and the city', Toyosaki Plaza is playing a major role.



第3回 長屋路地アートの案内

豊崎プラザ 大阪らしい長屋と路地の再生実験

学生による豊崎プラザへの感想

豊崎プラザは、学生の実物教育の現場になっている。5月29日、居住環境学科の1回生45名が豊崎プラザを訪れた。

学生の多くは近代的な住宅に住んでいるにもかかわらず、和風の長屋や路地に心地よさや懐かしさを感じ取っていた。また「素材は昔と共通でも、昔にはないデザイン」「完全に新しいものではなく、昔の良い所を残しつつ発展させることで、これからも伝統ある良いものが残っていくと思う」と、歴史を保全しながら、現代のデザインによって再生された建物に、新しい魅力を発見している。

豊崎プラザは、学生が歴史的な居住環境を実体験し、日本の伝統文化を再認識する上で、大きな教育効果を挙げている。

<< 綱本 琴(豊崎プラザRA)

梅田に近い都心にあり、大正年間に建設された主屋と長屋建の貸家群、路地が残る一郭です。オーナーと大学が共同して、老朽化した木造住宅の耐震設計、快適な住生活、住宅経営、居住環境の整備を住に、都市住宅としての長屋の再生モデルを目指し、居住文化の継承や市民の生涯学習なども含めて、創造的なまちづくりを進めています。



現地調査する学生たち

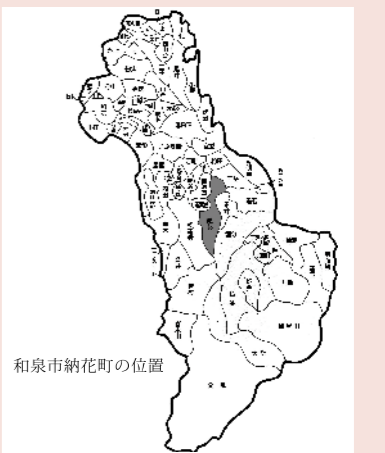
和泉プラザ 「地域の歴史的総合調査」の取り組み

2009年度 和泉市合同調査(第13回)に向けて

住民とともに地域の歴史を総合的に調査する和泉市合同調査は、本年度、和泉市納花町を調査地として、2009年9月28日(月)～30日(水)の2泊3日で行うことになりました。納花町は和泉市を南北に走る池田谷の南部、榎尾川左岸に位置し、近世の納花村が近代に南池田村大字納花となり、現在に至っています。納花集落は、1873(明治6)年に家数54軒・人口237人、2009年5月末現在は278世帯・人口793人からなります。

第1回実行委員会は5月13日(水)に開かれ、実行委員長 藤井正太(文学研究科D1、G-COE特別研究員)を中心に調査地の決定、日程の調整などを進めてきました。今後は調査地についての下見や事前勉強会、初参加者対象ガイダンス、パンフレットの作成などを随時行いながら、当日の具体的な調査内容・方法について議論し深めていきたいと思ひます。 << 久角健二(和泉プラザRA)

大阪市立大学日本史研究室と和泉市教育委員会で、毎年夏に実施する和泉市合同調査を、主要な活動として位置づけています。毎年、和泉市内の1つの町会を対象に、地域の歴史を多様な方法から総合的に調査し、地元住民とともに地域の生活構築の歴史を学んでいます。



扇町プラザ クリエイティブな都市型産業の原動力をフォローアップ

クリエイティブクラスが働きやすい都心再生を探る

扇町プラザでは5月14日から15日にかけて、扇町インキュベーションプラザ(Mebic扇町)、大阪市経済局による、東京都心部における、民間主導での創造ビジネス拠点のモデルケースに関する調査への協力をを行った。高度情報化の普及によって、様々な働き方が生まれている現在、これら新しい働き方に対応したオフィス提供のビジネスが東京では民間主導で開発され続けており、今回の調査は、クリエイティブならびに文化関連産業における成功事例を筆者が選び実施した。

本調査において、クリエイターが事業立地として好む物件は、同じく30・40歳代を中心とする知識集約型の仕事を行う事業者にも好まれる物件であり、オフィスとしての個性と界隈の魅力がクリエイターだけでなく独立し始めた新たな世代におけるライフスタイルとして定着を始めている段階を迎えていることが明らかになった。特に東日本橋・神田地区においては、これらクリエイティブな要望に対応できる不動産業が定着し、渋谷・青山の対抗軸としてのブランドが生まれ始め、新たに起業したギャラリーやショップ、飲食を目指して、平日の昼間であっても若者の行楽客が徘徊し、賑わいが創出し始めている状況を目の当たりにした。

これら歴史的建造物に負わない戦後物件による魅力の創出は、目黒の住宅地にありながら多くの顧客が海外からの富裕者層に占められるホテル、クラスカのように、デザイナーやアーティストによるクリエイティブが賑わいの創出のキーとなる状況がライフスタイルとして一般化し始めていることを示している。 << 岡田智博(扇町プラザRA)

印刷・放送・広告関連産業から派生した企業やクリエイターにより、創造産業集積が形成されている扇町地区。この扇町プラザでは、同じビルに立地する大阪市の創造産業インキュベーター「mebic扇町」との連携などにより、大阪ならではの人のつながりを大事にした創造産業の発展を、実践的研究を通じて支援しています。

フォーラム グローバル経済と芸術 ～フランスの文化政策を通じてみる、日本の芸術文化環境～

Forum: "The Global Economy and the Performing Arts
- Japan's Performing Arts and Cultural Policies as seen through France's Cultural Policy"



左から、小田中、ヴィナヴェール氏、相馬氏、平田特別研究員

2009年6月15日(土)、キャンパスポート大阪で、フランスを代表する劇作家・小説家であり、元ジレット社長でもあるミシェル・ヴィナヴェール氏をメインゲストに迎えたフォーラム「グローバル経済と芸術 ～フランスの文化政策を通じてみる、日本の芸術文化環境～」が都市研究プラザ主催で開催された(共催:青年団/(有)アゴラ企画・こまばアゴラ劇場、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)。

まず、第一部では平田オリザ(都市研究プラザ特別研究員/大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授)の基調講演が行われ、グローバリゼーションによる画一化の中で、民族性や宗教文化などの「小さな差異」を認め合う、多文化共生型のコミュニティ構築のために、芸術文化を中核にした街づくりが提言された。

第二部では、ヴィナヴェール氏、平田特別研究員、小田中章浩(文学研究科教授)による鼎談、第三部では、相馬千秋氏(フェスティバル/トーキョー プログラム・ディレクター)を交えて、フランスの文化政策、日仏における舞台芸術フ

ェスティバルの状況を概観しつつ、これからの芸術のあるべき姿、日本の新しい文化政策システムの必要性などが話し合われた。質疑応答も行われ、80人以上集まった一般参加者の熱気の中にフォーラムは終了した。

芸術を通じたコミュニティ再生の可能性と、それに必要なシステムの必要性を提示するフォーラムとなった。

<< 岡戸香里(G-COE特別研究員)



会場の様子

This forum was held on June 15 with the principal guest being the representative French dramatist and novelist Mr. Michel Vinaver, former president of the Gillette Corporation. An appeal was presented for community building with the performing arts and culture at its core, and the forms that the performing arts should take in the future, and the necessity for new cultural policies in Japan, were also discussed.

船場アートカフェ 芸術によるコミュニティ再構築

なぜ「船場」で「アートカフェ」?

船場は、天下の台所と謳われた江戸時代から、繊維問屋をルーツとする総合商社が戦後の復興を牽引した高度経済成長期まで、常に大阪の中心、ひいては日本経済の中心として栄えたまちです。しかし、1970年代末からの繊維不況や産業構造の変化などによってかつての賑わいを失い、今や「シャッター通り」と揶揄されるほどです。

2006年1月に開設した船場アートカフェは、このような歴史をもつ船場を拠点として「アートによる都市再生」の研究と実践に取り組んできました。さまざまな人やモノが集まる中心地であった船場には、経済的な地盤に裏づけられた豊かな文化が息づいています。その文化資源に着目しながら、アート環境を日常の中につくり出すことによって、コミュニティの再構築の可能性が高まると私たちは考えています。

船場アートカフェでは、地域コミュニティとの協働の試み(まちのコモンズ)や船場に豊かに残る近代建築の活用(船場建築祭)、アジア音楽への実践的アプローチ(船場音楽)、病院や施設などにアートを投入するプロジェクト(coco-A)など、従来にはない組み合わせを通して人々の感性を刺激することにより、人と人、まちと人をつなぐプロジェクトを展開してきました。

そもそもカフェとは喫茶店を指す語ですが、人々が集い語らう場の象徴でもあります。アートによる創造的コミュニケーションの形成を目指して、今後もさまざまなプロジェクトを展開する予定です。どうぞご期待ください。 << 石川 優(船場アートカフェRA)

芸術がもつ「接合/媒介する力」に焦点をあて、都市における芸術の可能性を追求しています。大阪固有の文化資産に着目しつつ、芸術を介して人と人をつなぐ新しいコミュニケーションの場を創造する試みを展開します。

URP G-COE International Colloquium 都市地理学を解き放つ —環境正義を事例として—

Unbounding Urban Geography:
The Example of Environmental Justice

URP G-COE International Colloquiumが、2009年6月6日(土)に大阪駅前第2ビルのキャンパスポート大阪で開催された。研究発表は、アメリカのミネソタ大学の地理学者エリック・シェパード教授とヘルガ・ライトナー教授によって共同で行われた。シェパード教授は、計量的な手法を用いた経済地理研究で、ライトナー教授は移民や都市開発の都市地理研究において注目すべき研究を行ってきた。

「都市地理学を解き放つ--環境正義を事例として」と題された発表は、主にアメリカのミネアポリスにおける環境正義の可能性についてであった。環境正義とは、環境被害リスクの不均等な分配状況の是正を目指すものである。そのためには、リスク(例えば、ゴミ焼却場等)の分配状況を把握して、その不均等を是正するべく集団的な声を形成することが鍵となる。

発表の前半では、シェパード教授が、地理情報システム(GIS)を用いて、コミュニティの全体よりも、内部においてこそ環境悪化のリスクが入り組んで分配されていることを可視化した。それによると、リスクはコミュニティの階級や人種のラインに沿ってではなく、それらを横断するカタチで分配されているのである。

後半では、ライトナー教授が、環境問題をめぐる意思決定過程にコミュニティの側からどのような社会的・政治的働きかけが可能なのか、その過程で大学はコミュニティとどのような関係を築けるのかという実践的課題についての説明を行った。さらには、他の機関や人々にも開かれた情報の共有・利用の可能性や、この試みが直面する様々な困難についても指摘がなされた。 << 北川真也(G-COE博士研究員)

A URP G-COE International Colloquium entitled "Unbounding Urban Geography: The Example of Environmental Justice" was held June 6, 2009 at Campus Port Osaka in the Osaka Station Front Building No. 2. A report was presented by Professors Helga Leitner and Eric Sheppard of the University of Minnesota, USA, on the problem of how the university's knowledge and the community's knowledge can work cooperatively in the process of achieving environmental justice.



ライトナー教授と質問に答えるシェパード教授

海外サブセンター便り from HONGKONG

The International Workshop On Urban Redevelopment in East Asian Cities: The People's Approach

香港サブセンターワークショップ

The Hong Kong Sub-Center co-sponsored an international workshop organised by the Department of Geography, Hong Kong Baptist University, on "Urban Redevelopment in East Asian Cities: The People's Approach", held on 7-9 May in Hong Kong. Urban redevelopment activities are found everywhere in cities in East Asia nowadays. It is, however, the commonplace that this development process has led to the displacement of population, demolition of older buildings, some with high historical values, and the obliteration of more tranquil and lively neighbourhoods to yield vacant land for redevelopment. In general, the public, and the poor in particular, have been worst hit by redevelopment. This workshop broadly applied a framework that invokes Lefebvre, Gramsci, Foucault, Harvey and Allens to comprehend how urban hegemony is achieved in urban redevelopment projects and assess the possibility of counter-hegemonic construction. Hong Kong, Tokyo, Singapore, Taipei and Seoul were included as case studies for elaboration. At the end, it was concluded that given the cruel reality, alternatives for the people are still there. Given its significance, the workshop was well attended by around 80 participants, local and abroad (including the US, Finland, South Korea, Taiwan) alike, even though it was mildly disturbed by the outbreak of Influenza A H1N1. << Wing-Shing TANG



a group photo of all the participants

2009年5月7~9日香港サブセンターにおいて、「東アジアにおける都市再開発—ピープルズ・アプローチ」と題して、香港浸会大学の地理系と国際ワークショップを共催した。このワークショップでは、様々なフレームワークを使用し、再開発事業の中で都市における支配のヘゲモニーがどのように変容し編成されてゆくの。またこうしたヘゲモニーがどうやって得られるのか。又はこうしたヘゲモニーの優勢にどうやって抵抗できるかを議論した。そのなか、香港、シンガポール、東京、台北とソウルの事例が取り上げられた。新型インフルエンザの発生のため、若干発表キャンセルの影響があったが、現地と海外あわせて約80人が参加し、巡検もおこなわれた。

こりあんコミュニティ研究会

Korean Community Studies Group

こりあんコミュニティ研究会は、都市研究プラザ副所長の水内俊雄と特別研究員の中山徹(大阪府立大学)の共同代表のもと、都市研究プラザ教員の全泓奎、G-COE 特別研究員の本岡拓哉、宮下良子、黒木宏一のほか外部3名の研究者が運営委員として、2009年3月に発足した。

研究者・市民・ジャーナリストが会員となる本研究会は、多様な分野間によるコリアンコミュニティに関する学術的研究や情報交流を通して、多文化共生社会の在り方を模索することを目的としており、都市研究プラザ社会包摂ユニットが目指す包摂型社会に向けた研究や活動にも通底するところが大きいといえる。

具体的活動としては、調査研究活動と情報交換活動に大別される。2009年度の財団法人住宅総合研究財団の助成を受け、すでに伊丹市旧中村地区や宇治市ウトロ地区、新宮市や広島市で調査を行っており、今後は、和歌山市や北九州市、さらには関東・東北地方まで研究対象を広げていく予定である。

その他、本研究会の重要な研究対象地域になっているのが、大阪在住の済州島出身者の文化的・宗教的拠点であった桜ノ宮龍王宮である。龍王宮にまつわる在日コリアンの記憶をどのように記録するか、そしてその成果をいかに多文化共生社会に接合させていくかも重要な課題である。

また、本研究会はこの桜ノ宮龍王宮という場所を利用すること自体が、社会に広くこの場所の発する価値を周知できると考え、定例研究会をこの龍王宮で実施してい



桜ノ宮龍王宮での研究会風景

る。新型インフルエンザによる延期のため合同となった第3・4回研究会(日時:2009年6月20日(土)14:00~17:00)では、高野昭雄氏(京都女子中学校・高等学校)による「戦前京都の都市形成と在日朝鮮人」と、本岡拓哉による「コリアンコミュニティのタイポロジー」の報告がなされ、30人以上の参加があった。

このほか、会員同士の情報交流の場および社会への情報発信のツールとするニューズレターを年4回刊行し、2010年3月には、コリアンコミュニティ関係の論文やレポートなどを収録する雑誌の発刊も予定している。

<< 本岡拓哉(G-COE博士研究員)

Academic staff and special researchers of the Urban Research Plaza are involved in the operation of the Korean Community Studies Group which was launched in March, 2009. The purpose of this research group, whose members include academic researchers, citizens, and journalists, is to try to envision the shape of a multicultural society through academic research and information exchanges concerning the Korean resident community taken from many different disciplines. In addition to research and survey activities, by putting on a regular research meeting once each month and publishing a newsletter four times a year, the group is providing a venue for information exchange between the members and is disseminating the information to society at large. The group also plans to publish a journal made up of research papers and reports on the Korean resident community in March of 2010.



こりあんコミュニティ研究会のニューズレター「koco-ken」

西成プラザ 生活困窮支援の老舗西成での実践を世界発信

脱貧困をめざした居住支援の ソーシャルビジネスを知る連続ワークショップ

野宿生活者からネットカフェ難民、ワーキングプア、ニート、そして派遣切りと、ホームレス現象は著しく拡散し、こうした居住困難者に対する一時的居住支援は急速に注目されてきた。西成プラザの中核であるJR新今宮駅、地下鉄動物園前直近のスペースは、あいりん地域の簡易宿所経営者から提供されている。簡易宿所も日雇労働者の一時的な中間施設であり、第3ユニットの研究テーマも、こうした中間施設の運営実態、利用者のニーズ、社会的・経営のミッションに関してきた。

社会福祉法人はこうした居住困難層の中間施設経営には手を出しかね旧来の福祉産業はこの分野では成立していない。大部分は、NPOか一部のソーシャルビジネスとしてこの分野に進出し、歴史はまだ10年に満たないという状況である。加えて、メディアのセンセーショナルな貧困ビジネス的なとらえ方により、社会保障の制度の抜け穴をカバーをしている公益性の高い重要なソーシャルビジネスであるにもかかわらず、成立したばかりのビジネスマーケットが白眼視され、全体像すら提示できていない厳しい状況にある。

第3ユニットは西成プラザを利用しながら、1月より【連続ワークショップ】セーフティネット不全を克服するハウジング供給のアクティブな試み -- ホームレス・ジョブレスの危機への対応、と称して4回開催した。(株)アプリシエイト(あいりん)、NPOサポーターハウス協議会(あいりん)、NPOエスエスエス(首都圏)、NPOふるさとの会(東京)に話題提供いただいた。10月9日にはこうしたテーマで全国シンポジウム(市川市)を行う予定である。 << 水内俊雄(都市研究プラザ教授)

カマン！メディアセンター、オープン

日雇い労働者のまちとして知られる大阪・西成(釜ヶ崎地域)で、地域の文化発信プロジェクトが動き始めた。その拠点として、カマン！メディアセンターを開設。西成プラザ、NPOコカールーム、研究者、アーティストなどでプロジェクトチームを結成し、世界の釜ヶ崎を発信していく。拠点は、商店街空き店舗を利用。企画のひとつとして、1970~90年代の釜ヶ崎地域の写真を街頭テレビで公開する。

6月1日のオープニングでは、地域の高齢者が活躍する紙芝居劇の公演や、歴史、まちづくり、アートなどの切り口でリレートークを繰り広げる。商店街の人や、障がい者、大学生らもまじり、世代や地域を橋渡しするようなコミュニケーションがさっそく生まれている。

地域情報の収集から編集、発信を繰り返し、つながりを広げよう深めようと試みる「カマン！メディアセンター」。文化創造と社会包摂の間を行き来する実践としてその最前線を走ります。 >> 平川隆啓(西成プラザRA)



カマン！メディアセンター

阿倍野プラザ 近代長屋を活用した居住支援プロジェクト

むすび紙芝居劇「ぶんちゃんの冥土めぐり」公演とお説法

2009年6月3日(水)、阿倍野プラザの協賛で、大阪市阿倍野区王子商店街の高齢者が集う「FAサロン」にて紙芝居と劇を融合させた紙芝居劇が行われた。「むすび」は、西成・釜ヶ崎に拠点を置き、平均年齢76歳の高齢者が自作の紙芝居と劇を行うサークルである。話は、幼くして冥土を訪れたぶんちゃんが、赤鬼・青鬼、閻魔に出会いながら、音楽に合わせて生き生きと「冥土めぐり」をするものであった。観客は80~90歳の高齢者が多く、演者の楽しげな演技に、思わず手拍子を叩いて盛り上がった。演劇後は、僧侶の川浪剛氏による「冥土」の解説と、死を迎えるに際し、「人との繋がり」・「仲間と集える居場所」が重要であるというお説法を聞いた。

阿倍野の高齢者が「死」というテーマに触れ、生と死の質を考える貴重な機会となった。 >> 黒木宏一(都市研究プラザ研究員)

阿倍野区の洋館付き長屋を活用した本プラザは、「生と死の質」に焦点を当てた活動を展開しています。高齢者のサロンや町家・長屋を使った店舗による街おこし、伝統建築の技術を継承する団体などと密接に連携しながら、街歩きや生涯学習などを通して、住民の豊かな暮らしを支える拠点として機能します。



音楽に合わせて踊り出す演者たち